

であり、第二は如何にして自然科学が可能であるかといふ問題であつた。自然科学の構成、限界、及び價值如何といふことは哲學にとつては少くとも最後の問題でないことは明である。

最後の問題でないといふのは必しも最初の問題であるといふ意味ではないが最終の問題でないといふことはその重要さに於て吾々の第一に考ふべき問題の一であるといふ意味でなければならぬ。夫故に科學の價值如何の問題が哲學にとつて最後の問題でない、科學にとつて最初の問題でないといふことは、この問題が科學に對しても哲學にとつても共に重要な意義をもつてゐるといふことに外ならぬ。そして最初の問題でないといふことゝ最後の問題でないといふ一見相反對した言葉が共に同一意義をもつてゐるといふことは哲學と科學とがこの問題の中に相互の結合點を見出し得る事實を語るものと見て差支がない。自然科学はこの問題に及ぶことによつて哲學の領域に入り、哲學はこの問題を取り入れることによつて自然科学と交渉する。それ故にこの問題を論じ得る人は一面最も偉大なる科學者であり同時に優秀なる哲學者でなければならぬ。かくの如き資格を完備した人を廣く世界に求めて吾々は之をたゞこの書の原著者ポアンカレに於て見出す。そしてポアンカレの著書を譯出し得る人を我國に求めてこの譯者ほど適當なる人を見出すことができない。最も偉大なる科學者にして同時に卓越せる哲學者の著書がこの翻譯に最も適任なる田邊學士によつて譯出せられたことを喜んで世の篤學の士に紹介する。

東京神田南神保町一六岩波書店發行(定價一圓三十錢)(中川得立)

優波尼沙土物語

木村龍寛著

「優波尼沙土は實に印度思想の寶庫を開くべき鍵鑰である」、古來印度思想と日本との關係は決して淺くはない、然し「純粹」の印度思想は現今の日本人にとつては全く新しいものである。「タゴール氏來朝前後からかけて、近來印度思想紹介者の殖えた事は驚くばかりであるがその多くは斷片的であつた然もその中には印度思想を誤り傳へて居るものすらある様に開て居る、この時に當つて「八年振りで故國の土を踏まれた印度思想専門の著者が「多年研究の結果を公にして印度思想の紹介の一助たらしむべき義務を感じ面してその第一着手」として著された本書は元より一の物語とは稱せらるゝもその責任や實に重且つ大なるものがあるといはねばならぬ、本書編を別つ事二、一を解説とし二を物語とす、解説編に於ては(一)優波尼沙土以前の印度思想、(二)優波尼沙土の形式的方面、(三)優波尼沙土哲學の概念等その中尙種々細節項目を分ちて専ら優波尼沙土の解説に努め、物語編に於ては當該原本思想の内容より分ちチャンドーギヤ優波尼沙土以下九種比較的古く、然も深玄なる哲學思想の表はれたるものを撰び商鞅の註釋に從ひ所要所を抜粹し稍六ヶしい物語式に抄譯と紹介とを兼ね各節の終りにはその節の要點をも摘出し讀者の便を計つてある、その物語編が本書全卷殆ど五分の四を占めて居る所から見ると本書名の由來も略ぼ推察が出来る、印度思想研究の入門書として參考になる事は之を疑はない、併し私は近頃珍らしい本書が無批評的に一般世人に讀まるゝ前に本書に對し聊か疑問を提出して置かねばならない

事を残念に思ふ。

著者がその序文に於て「こゝにいふのは吠陀時代から佛教時代に蒐録された古き部分」の「原本」だと言明されて居るので知らるる様に本書所依の原本が決して後代何處かの譯本でない事は私の甚だ喜ばしく思ふ所である、で最初私は本書の著者なり材料なりが實に不足のないものであるから之に依て從來の誤れる印度紹介の弊が救はれるであらうと確信し大なる興味を以て研究のため本書精讀の傍優波尼沙土本文や商羯羅の註釋を原本で調べて見た、所がそれからそれへと私の疑問は増して來た、で茲にその疑問の極めて代表的なもの二三だけを挙げ纏著深い著者の見識に依てその解決が與へられん事を切望する次第である。

(一)原語の讀方、例へば "athreya" の讀方がナイタレヤ、アイトレヤ、アイトレイ、アイトレヤ、オイトレヤ、アイトレイヤ、アイトレヤ、アイトレイ、アイトレヤ、オイトレヤ、オイトレヤ、ナラダ、ナラド等と讀まれ、"adhara" がナトルボ、ナトルバ、アタルバ等とされ、"Yama" がバルーナ、ボルノ、バルナ等と讀まれて居る、その他是の如き讀方の不定なるもの五十や六十語を下らぬ、その一々の讀方の異数を擧ぐるに至りては實に數百に上るであらう、(一々その頁を示さざるは所々に散在するを以て煩を厭ふてなり以下準之)。

(二)の特殊の場合即ち本書中一定したる讀方の異常なるもの、例へば "ritan" がアツマ、"Prana" がアラナ、"syvaphi" がナツシヨボチ、"Raikva" がローオイツコと讀まれたるが如し、その他この例殆ど全卷に充つ。

(三) S | s | sh | t | o | t | s | が混用せられある事。(四)原語が羅馬綴を以て書き表はされたる形跡のあるもの、例へば "managa" が "manuga" と記され、"Bhigna" が "Boigna" とし、"Sankhalpa" を "Sankhapa" としたる場合があるが如き、この例乏しからず。

(五)全卷到る處原本と異なる原語、或は正誤區々にして何れが眞の原語なるか不明なるもの百を以て數ふべく一々之を枚擧するの違なし。

(六)原語誤殺、例へば書中「ガンダルバの國」云々の文句がある而してその原語として著者は "Gandaha" なる奇怪なる語を挿入して居らるゝ(一六〇頁)之はガンダーラ (Gandhara) の誤殺にあらざるか原本には確かにこうなつて居る、是の如き例これに止まらぬ、果して何の意か、然しこゝが物語だといはるれば一應の理由は立つとしても原語まで變改するの必要何處にありとするか。

以上の外種々の疑義數へ來らば實に多からん今は只その主なるもの二三のみを代表的に擧げしのみ、著者の見識果して如何なるものあつて然るか未だ印度の土を踏まぬ私のために解決の勞を取らるれば幸甚である。

次に本書の構成と内容とかの方面に移りて少しく愚見を述べ著者の高教を俟つ事とする。

(一)當然原語を挿入すべき處或はその讀方を示すべき處に之を爲さず却て不必要なる所にそれが加へられて居るのが多くある、然し之は少しの不用意の結果らしく別に大した缺點ではない。

(二)然し普通名詞の譯語不一致は尠からず氣に懸かる例へば「地はその足」(二〇九頁)といふその「地」は「森羅萬象を備へて居ること

世界」(二〇六頁)と同一原語「Pithiv'」である、尚絅羅註釋の如何に關せずこの「森羅萬象云々」は當然「地」と改譯せられ度い、「足」との相對關係から見てもそれが優波尼沙土の原意であらうと思ふ、又「地」と譯して解釋上何等の不都合も見出されないのである。又七十二頁に著者はマンドーカ優波尼沙土なるもの、一六一六の一句を引用し「梵は不可見不可得不可言無眼無耳無足無手云云」と譯し、七十四頁にはモンドーカ優波尼沙土なるもの、一六一六の一句を譯し「彼は不可見不可取不可起無形無眼無耳無足手云々」として居らるゝ、マとモとムとの區別が常に明かでない本著の事であるから以上の兩者は共にムンダカ優波尼沙土であらう、そしてこの優波尼沙土にては一六一六と一六一六とは結局同一の場所を指す事になつて居る、若し然りとすれば元より内容上別に差支は無いが然しそれが果して同一人の精確なる譯といはるゝであらうか。(三)チャヤンドーギヤ優波尼沙土物語中(一八四頁)インドラとギロチャナ(著者に依ればビロチャナ)とが、ブラジャーバチを訪問し種々問答の後鏡に映る身體相應の姿を眺め得た時ブラジャーバチは「最早何も言はずに沈黙したそこで彼等兩人は今度こそは我等は私の眞意を解し得たのだ、だから師は斯く沈黙して居られるに相違ないと獨合點をして家に歸つた」となつて居る。然しこれではその獨合點の前後物語としても何だか物足りない無愛想な感じがする、然るにこゝに相當する原文(八八、八三)を見ると明にブラジャーバチは兎に角「それが我なり、それが不死不畏の梵なり」と言つて見た、そこで兩人は喜んでそこを辭したといふ事になつて居るこれでこそ前後の關係が活きて來る様に思ふ、如何に印

度の物語にしても沈黙は時と場所とを考へねばならぬではあるまいか、こんなのを外にもあつた。

(四)尙最後に、少しく方面を異にして大に研究を要する問題がある。著者は「犠牲供養の事と共に讃歌がはじめられ讃歌あると同時に梵書もあつた」(三二頁)そして「梵書と森書とは決して別時代に出來たものでなく各梵書の最後の部分が所謂森書なのである而してその森書の最後の部分が優波尼沙土なのである故に理具吠陀讃歌も梵書も森書も優波尼沙土も同時に存在して居たので、只だ信行者の性質及知識の深淺如何に依つて種々の種類に分れたのである」(三五頁)優波尼沙土は吠陀時代から存在したものである(三三九頁)として以上諸典籍の同時存在を再三主張しその理由として(一)優波尼沙土に内秘的太古文字が使用され(二)吠陀讃歌に使用されてある言葉よりも一層古き *Brāhmi* が記され(三)深玄の意味を一文字に含めて弟子に傳授された事等を擧げて居らるゝが、然し是等は優波尼沙土の古きを容易に認め得る(四二―四四頁)根拠としか見られず吠陀と同時に存在して居るものだといふ事は自ら問題を異にして居ると思ふ、著者は孔子(四一頁)やニウトン(六一二頁)の例を以て著者の主張を裏書せんとして居られるが案ずる所著者は眞理と史實とを同一視して居られるのではあるまいか、元より吠陀より優波尼沙土に至る諸典籍の間明確なる境界線なく著者のいはるゝ如く森書の最後の部分は優波尼沙土といひ得る状態なるも各典籍の思想比較研究の結果吠陀より優波尼沙土に至る順序階段はこれ自ら人類思想の變遷發展の系路を語れるものではないかと思ふ勿論常任なる眞理の點からいへば著者所言の如く優波尼沙土の

みならず釋尊の教説も龍樹の哲學もタゴールの思想も孔子の教訓もニウトンの發見事項も皆悉く劫初のあなたから存在し來つた眞理の開發に過ぎない、然し著者の如く之に依て優波尼沙土と吠陀と同時存在を主張せんとすれば當に優波尼沙土に限らず東西幾億年來今日に至る人類思想の産物は残らず劫初の一點に集中し歴史は零とならざるを得ぬ、畢竟眞理そのものと眞理より生じたる産物との關係、種と果との區別が明になればよいと思ふ、がこの點に就ては著者は別に「優波尼沙土哲學」を著し「天文学上の研究の結果」(四〇頁)などにより證明されてあるそうであるからこの問題はそれを讀むまで結論は見合して置くが至當であらう。その他の疑義と所見今は略す。

要するに若し以上述べ來りし中尠くとも私の疑問となした點だけなりとも解決されないとすれば本書には乍遺憾著者のみならず或は出版關係者の不注意と不誠實と早計とが到る處現はれて居るといひ得る、(然も梵語印刷上自然有り得べしと思はるゝ誤植は之を看過した事を明言して置く)若し忌憚なくいふ事が許さるゝならば私が本書を讀んで得た感じは恰も一の速記録を讀まされる様であつた、殊に漢字に於て梵が飯(佛典にては之を普通ボンと讀む(一九二頁)、我が語とせらるるが如き(二〇四頁)たとへ誤植とするもその極めて不自然なるものなることを知りて益々この感を深くせざるを得なかつた、然しこれ或は私の淺學の致す所であらんと恐る、著者よ請ふ私のこの痛ましき疑念を晴らせ、若し幸にして私のこの疑念が晴らされたならば私は私は本書を印度思想研究の入門書として相當參考になるものだと思はるゝ事を辭せぬ、眞面目なる

印度紹介の著述亦難事業なる哉、妄言多謝。(東京牛込大來町中ノ丸新潮社發行、四六版五二六頁、定價壹圓八拾錢)。(本田義英)

寄贈雜誌

哲學雜誌、心理研究、丁西倫理官講演集、六合雜誌、東亞之光、第三帝國、學校教育、教育、内外教育評論、普通教育、小學研究、教育研究、教育學術界、教育界、東京教育、京都教育時報、兵庫教育、奈良教育、静岡縣教育時報、越後教育雜誌、滋賀縣教育會雜誌、岐阜縣教育、三重教育、愛知教育雜誌、長崎縣教育雜誌、愛媛教育、都市教育、信濃教育、佐賀縣教育、宮城縣教育會雜誌、藝備教育、宮城教育、